



## 1ドル=100円と医大生の意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/217">http://hdl.handle.net/10271/217</a>

## 1 ドル=100円と医大生の意識

中西 毅

(経済学)

### **What did the Young Medical Students think about Today's Strong Yen (\$1=¥100)**

Tsuyoshi NAKANISHI

*Economics*

**Abstract:** On June 21st, 1994, New York Foreign Exchange Market recorded the highest exchange rate of Yen to U.S.Dollar  $\$1 = ¥99.85$  after the second World War. Then on November 2nd, 1994, it further recorded  $\$1 = ¥96.11$ . The Yen-U.S.Dollar exchange rate has appeared to be settled around  $\$1 = ¥100$  since then. But is it really normal, or not? If it is not normal, what will happen from it?

The reason why Japanese Yen has recorded such a high level rate  $\$1 = ¥100$  is essentially due to the Japan's big surplus of current balance in foreign trade. This comes from Japanese domestic under-consumption for foreign goods since the burst of the BUBBLE economy. But the main cause of the strong Yen of June 1994 was the speculation in the foreign exchange market since there was much fear of the growing inflation in the U.S. economy in June.

At that time soon I mentioned the situation of rising Yen in my Economics class at Hamamatsu University School of Medicine. The students studied and thought about this problem during their summer holidays. And they did their very unique, interesting reports as a result of their study in the first term. So reporting this historical condition of strong Yen, I will introduce their insightful works on this problem.

**Key words:** Yen, U.S.Dollar, exchange, speculation, under-consumption, strong Yen,  $\$1 = ¥100$ , medical student, BUBBLE economy, New York foreign exchange market, Hamamatsu University School of Medicine.

## はじめに

1994年6月21日、ニューヨーク外国為替市場は1ドル=99円85銭という円高の瞬間値を記録した。第2次世界大戦後のブレトン=ウッズ体制における円の対米ドル比価がはじめて100円を切る高値を記録したのである。そして、それ以降1ドル=9X円台は珍しくなくなった。原因は、基本的には日本の内需不足による貿易黒字の累積にある。しかし、為替相場の変動は、変動の原因もさることながら、変動の及ぼす影響も含めて分析されねばならない。(注)

筆者は、ここ浜松医科大学で1年生の経済学の講義を担当しているが、6月当時は、資本制経済の確立における産業革命の意義の説明にかかっていた。もともと、前年の1993年8月17日に円が1ドル=100円台を記録したこともあって、講義は通貨を中心に進めようと考えていたので、6月の後半以降の講義はただちに1ドル=100円われの現状把握とその意味の分析にとりかかった。

学生たちには夏休みの間に分析を進めるように指示し、9月30日までに前期の成績評価用としてそのレポートを提出させた。67名の受講者中48名がレポートを提出した(他の者は試験を受けた)。このレポートを読み進むうちに、また秋以降の円高の推移やマスコミの報道を見ているうちに、医大生たちの円高にかんする理解が並み大抵のものでないことに気がついた。

そこで、この1ドル=100円われという歴史的事態の経緯を記録し、その意味を分析し、それに対する医大生の反応を紹介しておくことは、日本経済のこの歴史的転換点の現れとそれへの特殊な階層の意識の反映とを記録するものとして意義を有すると考えた。事態が分かりやすいように、学生たちのレポートを、円高の経過把握、円高に対する分析、円高に対する見解、円高にかんする感想の順に配列した。もちろん、すべての学生のレポートを網羅することは不可能である。ここに掲載しなかったレポートが劣っているということはない。あくまでもここでは、学生たちの円高に対する意識が全般的に捉えられるように一部の学生のレポートを配列して紹介しているのである。

(注) 1944年7月アメリカのブレトン・ウッズで、戦後の経済体制を確立するため国際通貨基金(IMF)と国際復興開発銀行(IBRD)の設立が連合国によって調印された。IMFは固定相場制により為替相場の安定と為替の自由化を図った。基軸通貨をドルとし、金1オンス35ドルを基準に各国の為替相場が決められ、自国の相場の維持を義務づけられた。矢部他編『現代経済史年表』(日本経済評論社)33ページ。

## 1. 円高の進展の歴史

円・ドル為替相場は、1994年6月21日のニューヨーク外国為替市場瞬間値1ドル=99円85銭以降、上下の振幅はあったが、11月2日には同じくニューヨークで1ドル=96円11銭を記録し、その後も1ドル=100円とあってよい状態が続いている。この円ドル為替相場は歴史的にどの様に展開してきて今日に至っているのだろうか。まず、円とドルとの第2次世界大戦以降の関係を年表と図（I, II）とでみておこう。

### 1949年以降の円・ドル関係年表

- 49年 ドッジ・ラインで、1ドル=360円の単一固定レート設定。
- 52年 国際通貨基金（IMF）に加盟。IMF平価として、1ドル=360円を認定。
- 71年 ニクソン・ショック、米国がドルと金との交換停止。1ドル=308円に円切上げ。
- 73年 ドル切下げ。2月、円は変動相場制へ移行、1ドル=265円に。  
秋に第一次石油危機。
- 74年 ニクソン辞任、後任フォード。円下落、1ドル=300円に。
- 77年 民主党カーター政権誕生。ドル不安で円上伸、1ドル=240円。
- 78年 イラン革命をきっかけに第二次石油危機。1ドル=175円に。
- 79年 欧州通貨制度（EMS）発足。ドル防衛策で円反落、1ドル=250円。
- 82年 共和党レーガン政権（81年成立）の「強いドル政策」。  
中南米累積債務問題表面化、1ドル=270円。
- 85年 レーガンの政策が効果を上げず、ドル高是正のため、先進5カ国蔵相・中央銀行総裁会議（G5）がプラザ合意。そこで円高ドル安促進、先進各国協調介入を表明。  
1ドル=200円に。
- 86年 先進7カ国蔵相・中央銀行総裁会議（G7）発足、1ドル=150円水準に上伸。
- 87年 G7のルーヴル合意、ドルの一段安防止へ。ブラック・マンデーで世界株価大暴落。  
年末にかけ円急上昇、1ドル=120円に。
- 88年 1ドル=130円前後で安定。
- 89年 共和党ブッシュ政権誕生。G7、ドル高抑制で合意。秋に東欧革命。  
1ドル=140円で推移。
- 90年 東西ドイツ統合。一時1ドル=150円まで安くなった円は年末にかけて反発、  
1ドル=130円に。
- 91年 ソ連崩壊。欧州連合条約（マーストリヒト条約）合意。1ドル=130円で推移。
- 92年 欧州通貨危機、英国が為替相場メカニズム（ERM）離脱。一時、1ドル=110円台に突入。年末にかけ120円台に戻る。

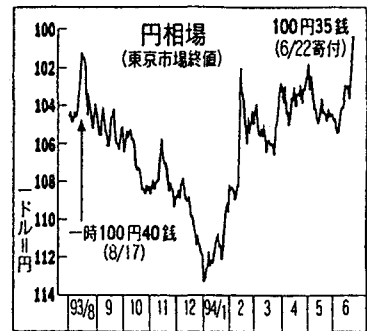
- 93年 クリントン米政権誕生。バブル崩壊不況の真ただ中下、内需が減り輸入が減って、輸出依存経済の日本の92年度の経常黒字1,260億ドルで過去最高。米国、円高を重ねて希望。欧州通貨危機再燃。4月に1ドル=110円割れ、6月に105円を突破。8月に一時、1ドル=100円40銭を記録。細川反自民非共産連立政権成立。
- 94年 米、景気上昇でインフレ懸念。6月21日、ニューヨーク市場でドル全面安、一時1ドル=99円85銭を記録し戦後初めて100円を切る。先進各国のドル買い協調介入の効果なく、日本の経常黒字を背景に、6月27日、東京市場で、戦後初の一時1ドル=99円50銭、終り値も99円93銭。6月29日、村山自社さきがけ連立政権成立。7月のナポリ・サミットでも為替安定の具体策出ず、7月12日東京市場一時1ドル=97円05銭、終り値も1ドル=97円07銭の最高値。11月2日、ニューヨーク市場瞬間値1ドル=96円11銭。

図 I. 長期円相場推移



『日本経済新聞』1994年6月23日

図 II. 最近の円相場



『日本経済新聞』1994年6月22日夕刊

## 2. 医大生の経過把握

6月の円高劇を医大生の詳細な記述によってまず了解しておこう。

OTさん： 6月14日、5月9日以来、約1カ月ぶりに終り値が102円台になった。これはカンター米通商代表らが、日米新経済協議が不調の場合制裁も辞さない考えを示したことなどから、市場関係者の間に「米当局の為替政策に変更があるのでは」との思惑が台頭し、米国の「円高容認」観測を材料に円買いドル売りが進んだためだ。

1週間後の21日、ついに「1ドル2桁時代」に突入した。これまでの円高は米政府高官の発言に振り回される「政治相場」が多かったが、今回は米国のインフレ懸念、日本、欧州の景気回復基調という経済情勢の変化が引き金になった。まず、米国とドイツの金利差が縮小し、米国株などドル建て資産に集まっていたマネーの、マルク建てなど欧州の資産への乗り換えを促し、ドル安マルク高の原因となった。さらに、米景気の好調でインフレ懸念が増幅され、マルク買いと同日動きが円建て資産にも起き、今回の円高につながったのだ。

日米欧各国の動きをみってみる。今回のドル安の原因となった米国は、日欧の米金利の引き上げ要求にもかかわらず、(米金利の引き上げが)株、債券にも波及するトリプル安のきっかけになり景気の腰を折る恐れがある、と慎重であった。またドイツでは、ティートマイヤー・ドイツ連邦銀行総裁が「ドル相場に関心があるのは(米国当局であり)ドイツ連銀ではない」と発言し、円高の裏にはドル全面安があるにもかかわらず腰の重い米国に対する不満を表明している。いっぽう日本では、日本銀行が円売りドル買いの市場介入を続けたが、けっきょく単独介入にとどまり金融・財政政策がほぼ出尽くしてしまった。

今回の円高は日米欧の通貨当局の「足並み」の乱れが見えただけであった。またそれぞれの事情から、金融政策と組み合わせたドル安防止策に踏み切れないため、円高ドル安はこの後もどんどん加速した。そして6月27日、終り値も初の99円台を記録した。この頃から7月上旬の主要国首脳会議(ナポリ・サミット)へ期待がよせられ始めた。7月は、円相場が1ドル=97円台に突入するなど円高基調が続くなか、為替相場に影響を及ぼしそうな日米首脳会議や主要国首脳会議、日米新経済協議が開かれた。

しかし、米連邦公開市場委員会(FOMC)は景気などを優先し「ドル防衛円高阻止のための利上げ」を見送ったことを明らかにし、またドイツ連邦銀行も理事会で、公定歩合の引き下げを見送りドル防衛に金利面で協力しない姿勢を鮮明にした。また期待されたナポリ・サミットは9日、為替相場安定に向けての協調を確認してなんらかの「声明」を出す方向で最終調整に入ったものの、具体的なドル防衛策を打ち出すまでにはいたらなかった。けっきょく市場は大きな波乱要素を抱き続けたままであった。このことからドル売りが膨らみ、東京外国為替市場で12日に終り値97円07銭と、終り値の最高値を更新した。ドルの地位は揺らぎ世界経済を不安定にしているなか、日米欧の通貨当局OBで組織する「ブレトンウッズ改革委員会」が「柔軟性のある為替相場幅」に為替変動を押え込む(という)大胆な新提案をした。しかし各国の財政・金融政策の手を縛りかねない内容だけに現役の政府関係者からは異論が続出し、どうやら実現しそうにない。

7月29日に円相場が1カ月ぶりに100円台まで戻り、この急な円高が一服したとの見方が強まった。これは米国が景気過熱によるインフレを防止するために利上げに踏み切るのではとの観測が強まり、ドル買い戻しの動きが広がったためである。7月30日、前日のドル買いの動きを加速した要因の一つだと考えられる日米新経済協議の調達分野交渉についての「米政府は期限

を遅らせる計画はないと発言したので、妥協して日本と合意するのでは」という解釈は、裏切られ協議は合意できないまま打ち切られた。このため8月1日の東京市場は、米政権による円高誘導が再燃するのではないかとの思惑から、一気に円高が進んだ。その後、徐々にドルが買い戻され8月3日には終り値も100円台に戻った。これは6月28日以来である。半月ほどは100円台、101円台を保っていたが、8月18日、米利上げでドル高要因が出尽くしたとの見方から、円買い圧力が強くなり半月ぶりに99円台に戻った。

今回、この経済のレポートを書くため新聞を読み、辞書で調べるうちに、経済をおもしろいと思うようになりました。感じたことは、数多くの会議が開かれたのに、どの会議も空振りに終わったことです。これでは首脳会議の有効性が疑われてもしかたがないと思います。どの国も結局、自分の国が一番大切なのだ、と思いました。また、おもしろいと思った点は、日銀の総裁の一言や、関係者の確実でない見通し一つ一つに、円相場が左右されていたことです。グラフで円の上がり下がり激しいところを調べてみると必ず要因があったので、興味深かったです。これからも円の動きに着目してゆきたいと思います。

### 3. 医大生の分析

ここでは円高のメカニズムや円高の意味、円高の及ぼす影響など、幅広い分析が行われたものを紹介する。あくまでも典型をなすものとしてまとまりの良いものを紹介するのであって、他のレポートが劣っているというわけではない。また、ここに紹介した分析を、筆者が全面的に容認しているわけではない。ただ、だいぶ良くできており医大生の水準の高さを程よく表しているといえる。

NGさん： 日本は現在円高である。円高とは「円が外国の通貨に比べて価値が高まること」で、たとえば1ドル=120円であったのが円高で100円になると、20円安くなった分日本は輸入品が安く買え輸入が増加する。

円高はどうして起こるのかというと、円に対する需要が高まるからである。それならば、円に対する需要の増加はどうして起こるのか。日本の輸出が増えると輸出代金として日本の輸出業者にドルがはいてくる。ドルはアメリカ通貨なので当然ながら日本では使えない。ゆえに日本の輸出業者はドルを円にかえる。そこで円に対する需要が高まる。外国側から円高を見ると、1ドル=120円が100円になると、1ドルで100円分のものしか買えなくなる。日本商品の購入をひかえる。そして日本の輸出へ。以上のことから分かるように、日本の輸出量の増加で円高となり、円高のために日本の輸入量が増え輸出量はへり、輸入業者が円をドルに替えて円の需要はへりドルの需要は増え、円高は自然に解消されるはずである。しかしこの関係はそんなに簡単にはいかない。

そもそも日本は輸出大国で貿易黒字である。このことが円高の一つの大きな原因となっている。ちなみに米国は貿易赤字で、日米貿易摩擦はこのあたりに関係している。しかしながら円の需要は貿易収支だけで決まるものではなく、日本の対外競争力(基礎的条件 fundamentals)が関与している。また対外黒字のほかに、実質経済成長率、失業率、内外金利差などが含まれる。さらに投機活動も加わり円レートの変動はきわめて複雑になる。レートの変動については完全には解明されていない。

円高により日本に有利な点もあるが、輸出がのびないといった問題もある。今の不況も輸出の不振(特に紡績、自動車、陶器)の影響が大である。円高のみならず円安の時でも、過度な円安はたとえば海外の材料が高くなって買えなくなるといった問題が生じる。このような日本にとって不利な状況になると、日本銀行が介入することになっている。日銀は円高の時は円を売ってドルを買い、円安の時はドルを売って円を買う。日銀は円を売ってドルを買う方がメインになっていることはいうまでもない。理想からすると円高にも円安にも傾いておらず、ちょうどよく均衡を保っている状態がいいのである。しかし先に述べたとおりそううまくいかないところが難しさでもあり、研究者からすると興味深い点となるのであろう。

日本の輸出量がのびず不況であるとはいえ、日本製品の質の良さから、高価になろうとも日本製品を買おうとする人々は海外には数え切れないほどいるという。ここに輸出大国たりうる日本のすごさを感じる。しかし米国が日本を恐れるように、日本にとって、日本と同じようにのし上がってきた中国、韓国は恐ろしい存在である。日本が米国のように貿易赤字になってしまう日は遠くないのだろうか。円高差益バーゲンでブランド品を安く購入したり海外旅行に気楽にいけるといった状況は長続きしないのか。経済は姿は見えないが不気味な雰囲気漂わせて生きていると感じた。

{「米、追加利上げ必要」IMF。95年は2.5%成長に減速。}

国際通貨基金(IMF)は今年の前年対米経済審査で米国の追加利上げの必要性を強調した。今年に入って5回の金融引締めを「適切な措置」と評価しながらも、米国経済がなお潜在成長力を上回って成長しインフレ懸念も残っていると判断した。同時に追加的な財政赤字削減も求めた。IMFは9月に改定する世界経済報告で、こうした政策を前提に米国実質成長率が95年に前年比2.5%程度の持続的成長水準に減速する、との見通しを発表する。IMFは先週、事務局で米国の経済政策を審査、31日の理事会で意見を集約した。この審査結果に強制力はないが米国政府に対する一つのガイドラインとなる。それによると、米国連邦準備理事会(FRB)による過去5回の利上げについては、IMF理事会として「インフレ予防に役立つ」と評価した。ただそれでも、米国成長率は前年比2.5%程度といわれる潜在成長率をなお上回り、「先行きのインフレ圧力の高まりを抑え切れていない」とし、追加利上げを「勧告、する形となった。その時期や利上げ程度には言及しなかった。医療保険制度改革の実行を含む追加的な財政赤字削減策の必要性も指摘した。



9/1。1ドル=100.01円となっている。刻々と状況は変わりつつある。今まで経済にあまり興味をもたなかったが、少しでも調べ始めると以外に楽しくなることがわかった。大学生にもなって社会の動きがわからないようでははずかしい。これを機会にもっと知識を深め自分なりの考えをもてるようにしたい。日本は内需拡大によって黒字を有効利用することが今何より必要なことであると思われる。国内のバランスと海外と日本とのバランスを保って（容易ではないが）歩んでゆくべきであろうと思う。外国とりわけ米国は日本の輸出量の削減を求め、また日本のやり方（貿易）に不平を言ってくる。しかしそういう方向で日本を攻撃するのではなく、米国製品の質の向上などに力を入れるべきなのではないかと思うが、日本びいきな発言であろうか。

最近、一年生の間では自動車の話が多い。価格についても当然話題となる。そんななか、ベンツやアルファ・ロメオが40万~70万円ほども値下げする現状を見ると円高の偉大な力（良いとも悪いとも言えぬが）を切々と感じてしまう。円とドルの関係はそのまま経済全体、社会全体の動向を表すといっても過言ではないのである。

MDさん： 円高の産業に及ぼす影響。

①為替の変動は産業に影響を及ぼし、②産業の動向が為替水準に影響を及ぼす。

①について。

A. 輸入に及ぼす直接的反映。1,000ドルの物について、

1ドル=120円の時、 $1,000\text{ドル} \times 120\text{円} = 12\text{万円}$ の支払い。

1ドル=100円の時、 $1,000\text{ドル} \times 100\text{円} = 10\text{万円}$ の支払い。

☆つまり、輸入する物の価格が下がったのと同様 → 輸入が増える。

B. 輸出に及ぼす直接的影響。12万円の物について、

1ドル=120円の時、 $12\text{万} \div 120 = 1,000\text{ドル}$ の輸出価格。

1ドル=100円の時、 $12\text{万} \div 100 = 1,200\text{ドル}$ の輸出価格。

☆つまり、輸出価格が上昇する → 輸出が難しくなる。

輸入産業には円高はプラスに働き、円安はマイナスに働く。輸出産業には円高はマイナスに働き、円安はプラスに働く。一般に多くの産業は直接間接に輸出入双方の側面をもつ。どちらがその程度が強いかにより影響が異なる。

電力業の場合： 火力発電ではコストの多くは原油やLNGにかかる。円高になると、原油、LNGの支払い額が減少。輸出はほとんどないので収入は変わらない。 → 経営が良くなる。

石油産業の場合： 上とほとんど同じ。

鉄鋼業の場合： 円高になると、鉄鋼石、石炭などの支払いが減少。しかし、輸出する鋼材は競争力を失う。

例えば、1トン5万円（U.S.A.では $5\text{万} \div 120 \approx 410\text{ドル/ton}$ ）で輸出していたとする。いま、

120¥/\$ →100¥/\$ となったとして、そのままの5万円で輸出すると、 $5万 \div 100 = 500$ ドル/tonに値上がりしています。逆に、410ドル/tonで輸出すると、 $410 \times 100 = 41,000$ 円の手取りに減ってしまう。

また、その鋼材を製造するコストは、原料費は下がったけれども同じ程度に下がっているかどうか。例えば人件費は円高になってもあまり変わらない。そして、コスト削減のために合理化や企業の海外転出（安い人手を求めて）が進むようになる。しかし、企業の海外転出が度を越して行われた場合、製造業の国内空洞化ということがおこる。すると日本円への不信が高まり、円が売られて外貨が買われるようになり、円安になっていく。そして国内空洞化により輸入が増えたところへ円安となり、経済は大きな打撃を受けることになる。

☆したがって、為替変動の安定化ということが必要となる。

②について。

産業の国際競争力が強いと貿易黒字を生み、その国の通貨の価値が高くなる。逆に、産業の国際競争力が弱いと貿易赤字を生み、その国の通貨の価値が低くなる。

◎感想： 為替と産業が密接な関係をもっていることに驚いた。円安は輸出産業には有益だが輸入産業には害があり、円高は輸出産業には不利であり輸入産業には有利であって、円安も円高も一長一短であることがわかった。また、為替の安定化の必要性がはじめて解った。だから今回の円高も早く安定させなければならないのだろう。

#### 4. 医大生の見解

ここでは今回の円高に対する医大生の見解＝意見を紹介する。前段にはそれぞれの現状分析があるのだが、それは割愛して、見解＝意見として比較的まとまりのあったもののみをここに載せる。

UH君： 私論「円高・ドル安」を調べて。 中学・高校と経済の体系を学んできたが、経済学は常に興味を持たせる学問であった。「神の見えざる手」によって操作される市場原理も実に明快で数学のようにおもしろかった。ドラッカーが来日したときなどは友達と目を輝かせながら激論を交わした。堺屋太一のいうプラス $\alpha$ の意味を理解しようと彼の本を読みあさった時期もあった。結果としては医学部への道を選んだが、いまだに経済の動きはおもしろい。今回、円高・ドル安の原因についても調べてみたが、どうやらこの元凶がクリントン大統領のワナであることは確からしい。「ドル高を期待する」というクリントン大統領の言葉は信じる余地がない。円高を貿易不均衡是正のために必要だとして、93年の政権発足当初から口先誘導している。過去20年の日本の対米貿易黒字は5,407億ドル（94年6月末）に達している。それを円高・ドル安で単純に解決できるとは思っていないまでも、「有力な武器」だと認識していることは事実であ

る。ところで円高にはメリットがあることも忘れてはならない。化石燃料の輸入は有利になったのだ。デメリットの最たるものとされる「空洞化」にしても先進国としては当然のこと。これを前提に経済の活力を高めるとするのが筋だろう。

FS君： 日本は戦後最大の経済不況にみまわれているが、円高は進んでいき、1ドル=98円と、100円台を突破したのはつい最近のことである。そして今、自動車産業は円高の影響で大赤字に陥り日本経済が今や崩壊するような言われ方をされている。しかし円高は円がそれだけの価値があり国際的に円はかなりの力をもっているということであり本当は喜ぶべきことなのだが、円が実際に力をもっているのはこれよりかなり円安であるということがかなりの問題である。EC、アメリカは日本の貿易黒字を少しでも減らそうとする意図から円高を容認しているのだが、このまま円高が進めばドルが崩壊しかねないのである。だからといって日本がこのまま同じ体制でずっと輸出してよいというわけではない。日本は少しでも輸出額を減らし内需を拡大しなくてはならないと思う。私個人としては、もうこれ以上円高が進めば海外に輸出している企業はもうけが少なくなり海外に進出しなくてはならないであろう。つまり日本は人件費削減のため海外に工場などを建てなくてはならないのである。そうすると日本本国での仕事がなくなり失業者が今よりはるかに増えてしまうであろう。これは内需拡大を目指す日本にとって大きな痛手になると思う。

## 5. 医大生の感想

ここでは医大生の日常生活に根ざした感想を紹介する。どのレポートも前段にそれなりの現状分析があるのだが、ここでは割愛した。表現は難点がみられても各人の記述どおりとした。

IG君： 私たちは日常の生活のなかではニュースなどで市場の情報などを目にするが、実際に実感することはあまりない。私自身、景気というものの変動を肌で感じたこともないし、親が商売人でもないので円の価値の変動を意識したことはまったくと言っていいほどない。しかし、今回（6～8月）の円の動向を追ってみて、いかに経済がわれわれの生活に密着しているか感じる事ができた。また、世界の経済が非常に密接に結び付きあっているということも感じた。いままで経済は自分にとって遠い存在のものであったような気がするが、今回で経済が私たちの生活レベルから始まっており、決してかかわらずにはいられないものであるということを感じ、経済に対する意識が高まった。

OHさん： 私事で非常に恐縮ですが、7月のおわりから米国に旅行する予定があったので、6月ごろから結構為替相場の情報を、日々ニュースなどで得ていたほうだと思います。ところ

が実際にデータを表にして分析してみると、円の相場は社会情勢を反映していて、思っていた以上に敏感であることがよくわかりました。「円は社会を表す」と言っても過言ではないでしょう。固定相場制から変動相場制に移行してはや20年が経過しました。このかんに円はどんどん高く、あるいは強くなってきました。これから円がどのような動きをみせてゆくのか、われわれ一般国民ももっと関心を寄せていく必要があると思います。もはや日本は、日本だけで生きてゆくことができないのですから。

OH君： 新聞を読む際いつも経済面は目を通さない。政治面や国際面も目を通すことはない。政治はニュース番組をみて理解する方が楽である。それは、政治面を読みこなすだけの知識とエネルギーがないからである。テレビでは特集や解説番組で発端から現在までを一貫して放送してくれる。新聞は前日の内容中心のため、それ以前の経過がわからなければ、まったくわからない状態になってしまう。経済などはなおさら理解できない。話の流れがどこから始まって現在ようになったか、過去を振り返ると切りがなく、また今後毎日のように変化することを考えると興味が湧くことはなかった。就職活動でもしていて経済の動向に敏感であるわけでもなく、どちらかといえば私たちの生活からは縁遠い。実際は身近であるのに気づいていないだけかもしれないが。今回、円の動向について3カ月間という短い期間ではあったが、新聞の経済欄を細かく見ることを強いられた。しかしながら苦痛にも調べてみると、私の知らない間にいろいろ円を左右する動きがあったことなどが知ることができ、それなりの成果はあったのではないかと思っている。

S君： 僕が中学のころから話題にとりあげられていた「牛肉、オレンジ自由化」に並ぶ「円安、ドル高」、アメリカの策略ですね。結局前者は施行され後者もどんどん進んでゆく。日本の弱さを感じます。まあ貿易摩擦が激しいからしょうがないことだと思いますけど。円安、ドル高。われわれ消費者にとってはありがたいことじゃないですか。海外旅行が気軽に行け、外国から安いものがどんどん入ってくる。まあしかし国の農家の人たちは大変ですわな。これじゃますます過疎が進む。僕は都会のよさを知らないから田舎の方がよいけど。国が国内の物に対し保護政策をとってなおかつ金に飢えた亡者たちを始末する。そしてアメリカに貿易黒字を出さしてやって、万事解決。理想的です。僕が小学2年で、ハワイに行ったとき、まだ1ドル150円くらいだった記憶があります(あくまで記憶)。その頃はまだ摩擦なんて騒がれてなかったからその時のようにすればいいんじゃないか。僕は経済についてはよくわからないのでこれで終わりにしますが、日本が金持ちになると外国人さんにいつも狙われるからそこそこでやめてほしいです。(円高を円安ととりちがえているが、よくあることなのでそのまま掲載した一筆者。)

T君： 予想されるとかいたものの、円の動きが予想できる才能は僕にはない。というか、皆

にないのかも知れない。神のみぞ知るといったところだろうか。6月には105円台だった円が一気に97円台になった。とてもすごい円高だと思った。昔、新聞で円高だ円高だといわれ、よくみていたころ(受験勉強前)は120円台だったと思う。その当時の僕はすごい下がったなあと感じた。円高というのに122から120に数値が下がっているのにとっても違和感を感じたのを覚えている。そしてドルと円でしか日常見ないので、ドルとマルクが為替されているなど知らなかったものだ。人の軽はずみな発言が全世界を脅かすようなことになるのがこの為替の世界である。為替というのはそのような発言や、戦争、サミット、経済状態によってどんどん変化してゆく。とてもすごいというか、旨くできていると感じた。1ドル360円時代から世の中はとても変わった。時代とともに為替も変わってゆくものだと思う。

HN君： コーヒーブレイク。今年の夏は昨年の冷夏とはうって変わって猛暑であった。夏という食欲も低下気味になってしまいが、こんな時こそ“冷うどん”である。また今夏、いろいろな出費が重なり経済的に苦しかった。はっきりいって、円高よりもこちらの経済学の方が私にとっては身近だった。こんな私を救ってくれたのが“冷うどん”であった。日本を今の私にたとえると、この“救世主”は貿易黒字の削減ということか？この期間のあいだニュースや新聞などマスコミのあいだで連日のように円高について報道されていた。これにより、円高による差益還元のために、店に行くといろいろ輸入品が安くなっていた。たとえば私が酒屋へ行ったとき、いろいろな洋酒が安く、ウィスキーのジャックダニエルが定価6,800円のところが2,680円になっていた。あまりの安さに思わず私は買ってしまった。本当におどろいた。日ごろ高くて手が出なかった輸入品が安く買えるとは、円高もなかなかいいのではと思ったが、他方、円高によって輸入品が安くなることによって国内産業が圧迫されてしまうのではという懸念もあり、私は頭をかかえてしまう。(以下略)

FM君： 実際、新聞、テレビなどマスコミで騒がれた円高ではあったが、自分の生活の中でどう変わったかといえばほとんど変化はなしだった。浜松のかた隅で、社会情勢から遠ざかってひっそりと暮らしているからであろうか、友達との少しだけの話題となって消えていった。だが事実、記録的な変化があり、国全体としてみると大きな影響があったと思うと、なんとも不思議な感じがする。さんざんマスコミでは困った顔して報道していたが、この円高、輸入車は安くなるし、海外旅行は安くなるわで、いいところもあるじゃないかと思う。楽観的な見方ではあると思うが、これが実際の一般大衆の声なのではないだろうか。もちろん円高の影響をまろにうけている仕事をしている人も多いと思うが、現にわが家ではこの機に輸入車を買った。

TN君： 私の夏休みの経済状況。7月21日から夏休みが始まった。学生といえどもやはり車がほしく、私はそのための計画をたてることにした。この時点での全財産は215,000円。これ

を300,000円に増やそうと思った。そのためにはアルバイトをする必要がある。そこで塾の講師をすることにした。時給1,700円であり、あまり良い待遇とはいえないが、何もしなければ時給0円だ。8月末日までに76,500円かせぐ予定ができた。あとは塾のチューターや模擬試験の監督などで、しめて100,000円はいくのではないかと予想された。300,000円あれば車の頭金と税金と保険料くらいは間に合うだろうと思った。これで親のすねなしで車が持てるのである。ところが重大なことを忘れていた。それは西医体である。私は水泳部に所属して行かないわけにはいかない。1週間家を出て大阪に行かなければならない。それにかかる全額を計算してみると何と99,000円！これでは夏休みが終わっても貯金はほとんど増えていないことになる。

西医体が終わったあと、全財産は81,050円。何にそんなに金を使ったのだろうか。それからは私の金を稼ぐ日々が始まった。交通費を浮かすために仕事場まで自転車で通った。(片道30分)車があればどんなに楽だろうと感じた。夏休みがもうすぐ終る。もうそんなに金を使うこともないだろうから、そろそろ、夏休みが終わったときいくら貯っているのか計算してみた。すると、230,050円。車を買うにはまだまだ足りない。でも9月からは家庭教師をすることになっている。そこは時給もいいからいつかきっと車を買えることだろう。今年の夏、はじめて自分で金を稼ぐという体験をした。そして分かったことは、金は貯るのは遅いけど、消えるのは早いということである。

## おわりに

NHKは1994年11月に、4カ月前の円高の事態を振り返る特集番組「マネー・ウォーズ。1ドル100円突破の8日間」を放映した。それによると、6月21日のニューヨーク外国為替市場における1ドル=99円85銭という最高値の瞬間値記録の前奏曲は、6月17日金曜日に始まっていた。この日、ニューヨーク外為市場には「Conference Board's Fosler says DLR could fall below 1.5DM」という情報が流れた。マンハッタンにある民間の経済研究所コンファランス・ボードが定期的に発表している通常の長期経済予測報告のなかで、「ドルはマルクにたいし、来年末までに1.50マルク以下にさがるであろう」という趣旨が述べられていたのである。これはコンファランス・ボードによれば「米・独の経済の実態からみてマルクは来年末までに徐々に値上がりするであろう」という経済原則の基本に沿ったふつうの長期分析結果の発表でしかなかった。外国為替市場は、米国のインフレ不安から、膨大なドル売りの気配であったから、この「ドルは1.50マルク以下に下がる」という短絡した情報をきっかけに、一気にドル売りマルク買いが行われたのであった。このとき、1ドル=1.64マルク台であったドルはその日のうちに1.60マルク台まで下がったのである。

土曜日・日曜日をはさんで週が明け、6月21日火曜日、米国の貿易赤字が発表されると今度はドル売り円買いがただちに始まった。円は1時間足らずで1ドル=102円台から99円85銭ま

で一気に上昇した。この動きを加速させたのは、なんと基本的には日本の銀行によるドル売り円買いであった。日本の銀行はNECのような日本の輸出企業とのオプション契約で、数カ月先の為替レートを固定して企業との為替に依っていたので、急激なドル安はその目減り分だけ銀行の損失となるのであった。そこで、ドル売りが始まるとともに日本の銀行は一気にドル売り円買いに走ったのである。こうして、日本の輸出企業が、円高によるドル建て輸出代金の目減りを恐れてオプション契約していたことが、今回のドル売り円買いに拍車をかけてさらに円高を呼び、今後の輸出をますます困難に追い込んだというのである。これがNHK特集の中心的内容であった。

しかしその後も円高基調は継続し、1995年が明けても1ドル=99円台が基調となっていることからみれば、6月の1ドル100円突破劇は本質的には、アメリカ経済のインフレ不安と日本経済の内需不足という日米経済関係の現状を反映したものにほかならず、投機筋や銀行などによる為替相場のその時々への攪乱は変動相場制の必然的副産物でしかない。そして、外国為替市場の変動相場制は資本主義的自由競争の必然的反映であるのだから、もし変動相場制をコントロールしようというのであれば、それは資本主義そのものをコントロールすることにほかならない。資本主義の本質は自由な利潤追求ということであるのだから、この自由な利潤追求活動からなにを護るのかが鮮明にされなければコントロールは意味を失う。経済の国際化が先進国と途上国との間で進行しているこんにち、なにを護るのかという価値判断は大国の利己の利害によるものであってはならず、世界全体の十全な相互理解によって生み出されねばならない。

#### ※資料について

医大生の作成した資料を二つ紹介する。紹介する理由は二つある。一つは、今回の円高の事態がこれらの資料によって分かり易くなるからであり、もう一つは医大生がどのような資料を使っているかを示すためである。この二つの理由にもっとも適合するものを選んだが、これ以外の資料にも優れたものがたくさんあった。資料に関しては、制作者の苦労を考えて実名で紹介する。その際、本人の了解を得た。

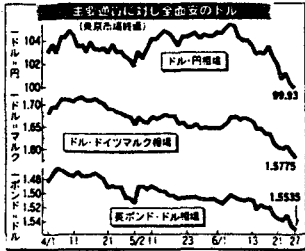
資料Ⅰは、鈴木布衣子さんの作成のものの一部である。幅広い資料を駆使して、大変レベルの高いレポートを作成していた。資料Ⅱは、西尾信一郎さんの作成したもの的一部分である。数値をパソコンで処理して大変分かり易い資料が、レベルの高いレポートに添付されていた。

#### ※「西医体」について

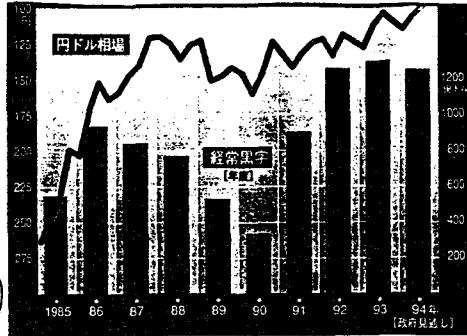
TN君の感想の中ででてきた「西医体」とは、「西日本医科学生総合体育大会」の略称で、これは、「西日本（静岡県以西）の国公立大学医学部医科学科学生をもって組織され、毎年夏に学生の手によって運営される大会である。」（『浜松医科大学開学20周年記念誌』59ページ）

資料 I (鈴木布衣子さん作成)

(図2) 主要通貨の対ドルレートの動き (図3) 対ドルレートと日本の経常黒字の動き



出所: 日本経済新聞 (平成6年6.28)



出所: AERA (平成6年7月4日号)

(表1) 米国の貿易動向

(単位: 100万ドル, Δは円化)

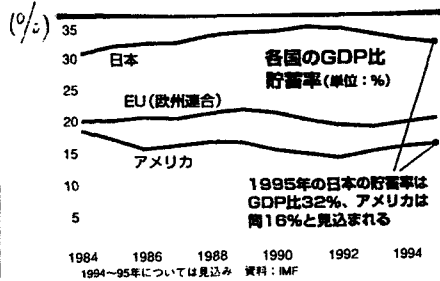
年	輸出	輸入	貿易収支	経常収支
1981	237,085	265,063	Δ 27,978	Δ 6,339
1982	216,442	243,952	Δ 27,510	Δ 8,051
1983	205,639	258,048	Δ 52,409	Δ 40,790
1984	223,976	330,700	Δ 106,724	Δ 101,532
1985	218,115	336,500	Δ 117,685	Δ 121,721
1986	227,159	365,438	Δ 138,279	Δ 147,529
1987	254,122	406,241	Δ 152,119	Δ 163,474
1988	322,426	440,952	Δ 118,526	Δ 126,656
1989	363,811	473,211	Δ 109,400	Δ 101,143
1990	393,592	465,311	Δ 101,718	Δ 90,428
1991	421,730	487,129	Δ 65,399	Δ 3,682
1992	448,164	532,665	Δ 84,501	Δ 68,401

出所: アメリカ商務省 Survey of Current Business

(注) 輸出入は通関統計, 輸入はCIF, 輸出はFAS A-入。

経常収支は国際収支統計 A-入。

(図4) 各国のGDP比貯蓄率

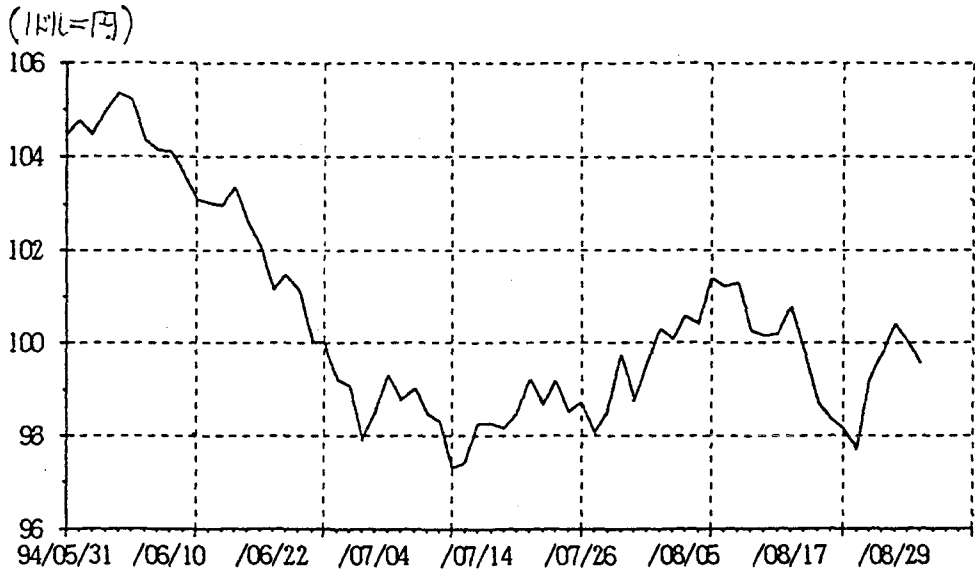


出所: NEWS WEEK (1994.7.13号)

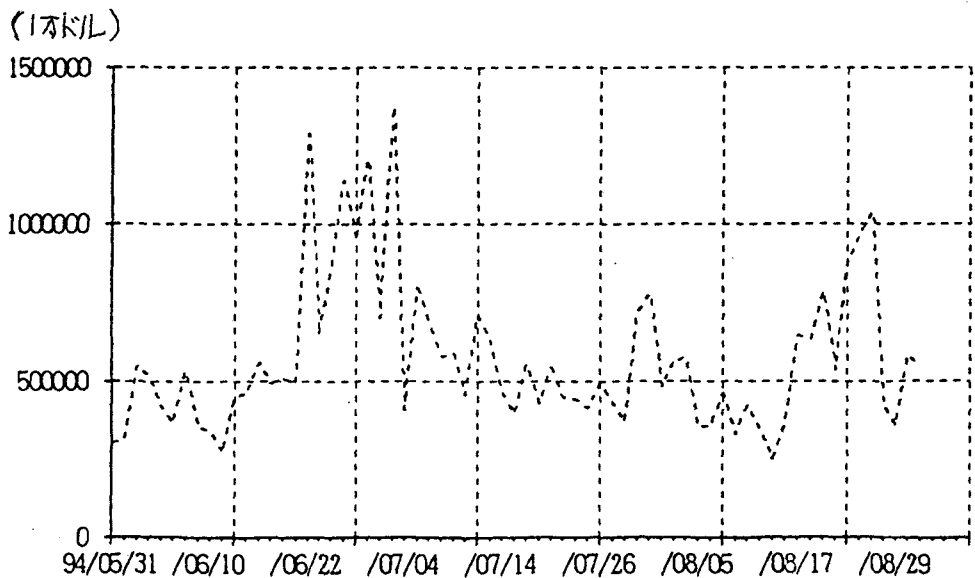


資料Ⅱ (西尾信一郎君作成)

# 東京外国為替市場・円相場 中心値



# 出来高



平成7年1月9日受理